

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

デیلیー・ジーザス・ニュース #117

10. 信者はイエスへの信仰を通してイエスと一つになる

ヨハネ6.52-59

52 ^Jするとユダヤ人たちは互いに論じ合って言った。「この人はどうして自分の肉を私たちに食べさせるのか。」

53 イエスは彼らに言われた。 *「よくよくあなたたちに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はありません。 54 わたしの肉を食べ続け、わたしの血を飲む者は永遠の命を得、わたしは終りの日にその人をよみがえらせます。 55 わたしの肉はまことの食物であり、わたしの血はまことの飲み物である。」*

56 *「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は皆、わたしのうちに住み、わたしもその人のうちに住みます。 57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べている者もわたしによって生きるのです。」*

58 *「これは天から降って来たパンです。あなたたちの先祖はマナを食べて死にましたが、このパンを食べる者は永遠に生きるのです。」*

59 イエスはカペナウムの会堂で教えているときにこう言いました。

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = ^{MT}、マーク = ^M、ルカ = ^L、ヨハネ = ^J、使徒行伝 = ^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、*イエスの言葉は赤字で斜体で書かれています*。旧約聖書からの引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト

位置	カペナウムのシナゴーク
タイムライン	4月上旬 (26ヶ月目)
イエスの生涯の文脈	第4段階：ガリラヤにおける大宣教
	I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波
タイトル	10. 信者はイエスへの信仰を通してイエスと一つになる

コメント：

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

1. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

この朗読は、「命のパン」に関するイエスの教えの結論です。これはおそらく、イエスが公の宣教において語ったことの中で最も過激で、誤解されやすい言葉でしょう。しかし、ここでイエスが用いた象徴や比喻を正しく解釈すると、最後の約束は、イエスが語った言葉の中で最も豊かで、最も励ましに満ちた言葉の一つとなります。

イエスは永遠の命の創造主であり、その維持者であるにもかかわらず、「パン」を食物が肉体の命を維持する役割として考えていました。これらの節で「パン」を「食物」と表現した後、イエスは「わたしの肉を食べる」と「わたしの血を飲む」という、かなり衝撃的な言葉を付け加えました。ここで2つの点を明確にする必要があります。

(1) イエスが「食べる」と「飲む」と言ったのはどういう意味ですか？

(2) イエスは「食物」、イエスの「肉」、イエスの「血」とは何を意味していたのでしょうか？

イエスは「食べる」(この説教全体を通して繰り返し用いられた主要な動詞の一つ)と「飲む」(6章53～56節のみ)を、イエスを「信じる」ことの同義語として用いました。ヨハネによる福音書において「信じる」と「受ける」という動詞が互いに同義語として用いられていることを思い出すと、これは驚くべきことではありません。例えば、ヨハネは福音書の冒頭でこう記しています。「しかし、イエスを受け入れた人々、すなわち、イエスの名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」(ヨハネ1章12節)イエスがこのメッセージの中で「食べる」と「飲む」という言葉を使ったのは、前日に奇跡的な方法で人々に命を支える食物を与えたことを人々に思い起こさせるためでした。

「食べる」と「飲む」ことは、私たちが食べ物を物理的に「受け取る」方法を表しています。一方、「信じる」とは、私たちがイエス様を霊的に「受け取る」方法を表しています。私たちは食べたり飲んだりすることで、体内にエネルギーの源を取り入れることを選択します。同様に、イエスを信じることを決意するとき、私たちは聖霊の形でイエスを内なる存在に受け入れます。口ではなく、信仰によってイエスを受け入れます。すると、食べ物や飲み物が私たちの体内でエネルギーとなるように、イエスご自身も私たちにとって永遠の命のエネルギーとなられます。このように、ヨハネによる福音書では「信じる」と「受け取る」という動詞が同義語として用いられており、ここでイエスは「食べる」と「飲む」を「信じる」の同義語としても語っています。

イエスは昨日の朗読の中で、「肉」の意味を自ら定義されました。「わたしは天から降って来た生きたパンである。このパンを食べる人は永遠に生きる。このパンはわたしの肉である。わたしはこれを世の命のために与える。」(6.51) イエスはここで、私たちの罪のために十字架上で御自身の体(肉)を捧げること語っておられました。この箇所では「血」の定義はなされていませんが、新約聖書では一貫して「イエスの血」はイエスが十字架上で流された血を指しています。したがって、「イエスの肉を食べる」と「イエスの血を飲む」ことは、イエスを復活した「神の子羊」、つまり私たちのために御自身の体と血を犠牲として捧げられた方として信じることを意味します。

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

1. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

イエスの体（肉）を象徴する「パン」を食べ、「血」を飲むことは、聖餐、つまり主の晩餐の儀式によく似ています。この表現は、イエスとパウロが後に聖餐について語った言葉とよく似ていますが、ここでイエスが何を語っているのかを自ら説明している箇所から、彼が念頭に置いていたのは聖餐ではなかったことがわかります。

イエスは、信仰によってイエスを受け入れること、そしてそれによってもたらされる永遠の一致について語っておられました。イエスが「生ける水」を一口飲むと井戸となり、やがて泉となって水の川の源となると約束されたように、イエスの「肉」を一口「かじる」と三位一体との永遠の一致がもたらされます。聖餐は、私たちが信じるときにイエスとの永遠の一致を創造したイエスの犠牲の現実を指し示しますが、現実そのものではありません。イエスはここで現実そのものであることについて語っておられました。私たちはどのようにしてそれを理解できるのでしょうか。

イエスは結論の中でそれを明確にしました。

56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちに住み、わたしもその人のうちに住みます。57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるのです。58 これは天から降って来たパンです。あなたがたの先祖はマナを食べて死にましたが、このパンを食べる者は永遠に生きるのです。」

6章56節で「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む」信者について語った後、6章57節ではその人を「わたしを食べている者」、58節では「このパンを食べている者」と表現しました。ここでの「食べる」は「食べる」と同義です。言い換えれば、イエスの肉と血を食べるという過程は継続的な行為、つまり絶えず食べ続ける、あるいは食べることなのです。ここで重要な点があります。この「食べる / 食べさせる」という行為はどのように継続するのでしょうか。イエスは6章57節で、信じる / 食べる / 食べさせるという過程を全く予想外の方法で説明しました。「生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べている者もわたしによって生きるのです。」

「わたしが父によって生きているように」というのがイエスの説明です。「同じように」という言葉は、この箇所におけるイエスと私たちとの関係を、イエスと父との関係によって限定しています。信者とイエスとの関係は、イエスと父との関係と同じです。イエスが父に住まいを定め、父がイエスに住まいを定めたように、私たちもイエスに住まいを定め、イエスは私たちの中に住まわれます。

イエスはどのようにして父との一体性を体験したのでしょうか。記念として、あるいは聖餐式を執り行うことで、父との一体性が維持されたのでしょうか。それはあり得ないことです。なぜなら、イエスがこの言葉を語った時、聖餐式を経験したことは一度もなかったからです。しかし、この言葉を語った時、イエスは既に永遠に「父の中に、父が私の中におられる」状態で生きていたのです。

イエスは父との一体性を維持することについて語ったとき、聖餐の儀式について語っていなかったため、弟子たちとの一体性を維持するものとして聖餐について語っていたわけでもない。「同様に」という修飾語は、この解釈を可能にするだけである。

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

1. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

聖餐は、三位一体との相互に内在する関係を確認し、再体験する上で、深く力強い役割を果たします。だからこそ「聖餐」と呼ばれるのです。しかし、聖餐は三位一体との一体性を生み出すわけでも、それを維持する基盤でもありません。聖餐が三位一体における一体性の基盤であり、三位一体の各位格が相互に内在し続けるための手段であるのと同じです。聖餐は、私たちが個人的に、そして集団的に神との一体性を経験する上で重要な役割を果たしますが、神の内在を生み出したり維持したりするものではありません。

イエスと父なる神との関係は、聖霊を通して互いに内在する永続的な結合でした。私たちとイエスの結合もまた、聖霊を通して互いに内在する永続的な結合です。なぜなら、それはイエスと父なる神との関係と「**同じ**」だからです。イエスを信じ、イエスを食し、イエスを飲むことは、聖霊を通してイエスと常に一体となり、交わりを深める過程へと導きます。これはすべて、イエスご自身が聖霊を通して父なる神と常に一体となってこられたことと同じです。

信者は「**わたしに留まり、わたしも彼らに留まりなさい**」（6章57節）。逮捕と死の直前、イエスは弟子たちに「**わたしに留まりなさい**」と命じました。この互いに内在する結びつきは、神と私たちの関係を最も深く表現した言葉の一つです。これは選択肢ではなく、主の明確な命令なのです。

この結びつきは、イエスを信じることによって生まれるものです。ヨハネによる福音書4章14節と7章38節でイエスご自身の内住を描写する際に用いられた「飲む-井戸-泉-生ける水の川」という段階のように、「命のパン」の教えは、イエスにあつての私たちの人生における信じられないほどの豊かさと活力を表しています。

イエスは受肉によって天から降ってきたパンです。ですから、信仰によってイエスを一口でも食べると、イエスは私たちの内に宿り、永遠に続く力と命の源となり、三位一体の神との永遠の一致へと導きます。イエスは最高品質の超自然的な「食物」です。信仰によってイエスを一口でも受け取ることで、永遠の豊かな命が保証されます。

この永遠の命こそ、イエスがカペナウムの会堂でこれらの言葉を語った時、5000人に食事を与える奇跡という象徴を通して聴衆に提供していたものなのです。イエスはまた、世界中のすべての人に当てはまる普遍的な言葉を明確に用いることで、同じ永遠の命の約束をすべての人にも与えようとしたのです。

応用：

あなたは、イエスの限りない力と恵みによって、あなたの内に、そしてあなたを通して生きて下さるイエスに信頼を置き、日々、一瞬一瞬、絶えずイエスから恵みを得ていますか。イエスは御父との交わりの中で、このように生きられました。そして、イエスは私たち一人一人との交わりの中で、このように生きたいと願っておられます。

今日、あなたはどのようにイエスを養いますか？ イエスがあなたの中で自由に生きることができるよう、どのようにイエスにとどまりますか？